

アラシが来る

上杉ナツヤ書籍

グリドスキャン: ユートピア

グリドスキャン: 開始 - プロローグ

グリドスキャン: 報復

グリドスキャン: 戦争

グリドスキャン: トリビュート - 短編小説アンソロジー

グリドスキャン: 連立

グリドスキャン: 暴動

アラシが来る

グリドスキャン物語

Natsuya Uesugi

ナツヤ ウエスギ

著作権©ウエスギナツヤ。

グリドスキャン:トリビュートから元の著作権©2014

佳子鈴木による翻訳

全著作権所有。本書の一部または全部を転載または著作権者から書面での許可なしに、いかなる形態または複写、記録、または任意の情報の蓄積と検索システムによるものを含む、電子的または機械的ないかなる手段によって送信することができます。

これはフィクションの作品です。名前、文字、場所、事件はどちらかの著者の想像力の産物であるか偽る使用されており、実際の人に任意の類似点、イベント、生きているか死んで、またはロケールは完全に偶然です。

在庫画像に描か任意の人々がモデルであり、そのようなイメージは、説明のみを目的として使用されています。

書籍の献身

作るための私の第九年生フランス語の先生に私は文学を愛しています。

私の大学に日本人の先生、私は大好き言語に私をもたらした者。

私の最初の短編小説を書いた人のための私の三年生の英語の先生へ。

グリドスキャンの詳細については：

<http://www.grydscaen.com>

表紙には：太平洋準州のヘブン 15 部分におけるエシェロンの町並み、ナツヤ上杉によって例示。

キャラクター

ローマは - ジオサーマル PSI を持っています。ホームレスの子供です。たサイ派の手に実験したが、彼の psi コンディショニングが正しくかかりませんでしたし、彼は路上で投げ出されました。ハッカーです。

X ザンダー・アラシ- 門限でエシェロンとパトロール通りに動作するゾーン警察官。

ローマの美しいホストフレンド. ロムと友達であり、穴のx定格雑誌店の外に働くストリートハスラー。

アラシが来る－第1章

X サンダー・アラシは真っ黒な巡査制服に、ハーフフェイスのヘルメットをかぶって目を隠した。同僚の事務官に「X」と呼ばれているが、あれ以降ずっとレーダーの下で飛び回って、今はもう付き合わないことにした。その制服のせいで、彼は戦争に行く人のように見える。胴体防具はちょっと重かったが、弾丸が入れないものだった。エシュロンの夜は特に危なかった。ナイトスティックを手で叩きながらドレイク道を歩き、そしてアスター道に向かって裏道に入った。

「アラシが来るよ…」と、街角を走り、裏道で姿を消したホームレスの子は叫んだ。ほかの子はその叫び声を聞いて、歩道で物乞いするのをやめ、自分のおつりを始末して、帽子をかぶって迅速に逃げた。

日が落ちるとき、巡査官は夜と犯罪の危険がないようにエシュロンの街道をパトロールした。午後6時以降も街にいる若者がターゲットになってしまった。若いホストは特に日が暮れると、レーブか殺害の対象にならないように用心しなければならなかった。

「アラシが来るぜ！」別のホームレスの子供が叫んで、ナップザックを拾って走り出して、まもなく姿を消した。その叫び声を聞いて、ホームレスのサイキック少年の群れも散った。

「あいつは煙を吹き飛ばしただけよ。嵐なんかねえよ…」燃え尽きたコンビニの前に立つもう一人の子はタバコに火をつけ、薄情な表情で夕暮れの日を眺めながら、ニコチンを吸い込んだ。

「でたらめ言うな！アラシが来るんだ！」ぼろぼろな服を着ている子がそういいながら姿を消した。

X サンダー・アラシはアスターにつく前に、裏道の端で足を止め、黒いズボンのポケットから手帳を取り出した。最後の日差しが消えていながら、街に残る子供はまだいた。街灯と商店の窓からの光は歩道を照らした。X サンダーのスクリーンで、子達のエシュロン IDにあるDNA タグはヒート・シグネチャーの上に青で表示された。手帳を開くと、周りにいる子供の名前はその人数の下に出てきた。

二階に、引き裂けた縞柄の長袖シャツと黒い指なし手袋を着て、ジャックの上の紙を片側削った子がいる。裏道に立って、何か手にしてみているアラシは、黒いヘルメットのプラスチックのハーフフェイス防具に手帳が光った。そんなアラシを見て、その子は手を口につけ、壊れた窓に寄りながら大声で叫んだ。

「アラシが来る。街から離れろ！」と、燃え尽きた廃墟に姿を消した。ほかの子達は従って消えた人が何人かいた。だけど、タバコをくわえる少年は残った。裏道の外をのぞいたら、手帳にその子の名前がはっきり写ってきた。X サンダーは区域警察本部に電話して、非行少年を引き取る「トラック」を呼んだ。

道の近くにある窓から、もう一人の子は10分間後来たトラックを見て警告を出した。「アラシが来るんだ。トラックにつかまるな！」

その子は次から次へとタバコを吸っていた。誰かから一箱盗んだ彼はラッキーだった。汚れた黄褐色のトレンチコート、黒い服とだらしのないモーホークを着ているロムはその子の前に立ち、タバコを奪い出した。

「ばか者！アラシが来るんだぞ」ロムはその子に怒鳴りつき、タバコを道に捨てて頭の後部を強く叩いてやった。そしれ遠くへ走り、セントラルに消えた。ロムはシズオコ・ゲットに向かって夜の闇に姿を消した。そこにビルがあって、じめじめな路地があり、行き止まりばかりの迷路だ。迷路に誰もいない。

もう一本のタバコに火をついた子の後ろに、Xサンダーは歩み寄った。その子は道を走り、迷路に消えたロムを見ていた。Xサンダーはしばらくそこに立って、その子を黙って見ていた。そしてポケットからエレクトロニック・カラーを取り出して、後ろからタバコを吸う子の首に嵌めた。トラックが来た。その子は両手を首に伸びてもがいたが、カラーがロックされ、脱出できない。このカラーは行動範囲を制限する。Xサンダーは手帳でその子のコーデスパワーをスキャンし、サイキックレベルを登録した。トラックからもう一人の区域警察官が出て、黒いつり棒をつけて、両手を子供の首においてトラックの後ろに入れた。その子はケデック鉱山の重労働キャンプにファーストクラスで行くことになる。トラックのバックドアは閉まった。Xサンダーに車体を軽く叩かれ、トラックは区域に向かって走り出した。その子はもう二度と会えない。

ロムは迷路の始まりで裏地を引きずり出して、頭を振って低くつぶやいた。嵐の警告に耳を傾け。自由でいたいなら。Xサンダーはロムの方向に手帳を向かって信号を探した。ロムのID番号は画面に映した。ロムの手帳は警報音を鳴り出した。Xサンダーのアプリにタグをつけられた。ロムは速やかに手帳を取り出して、スクリーンにある「スクランブル」にタッチして、エッシュロンIDにある自分のDNAタグに関するXサンダーの信号をスクランブルした。スクリーンにセーフのメッセージが出るまで、ロムは少し待った。そして迷路に飛び込んで、夜に消えて、嵐から離れた。

次の日もXサンダーが同じポジションにいるが、まだ午後2時で、嵐がまだ遠い。Xサンダーはドレイクの街を歩き、アスターにあるザ・ホールXレート雑誌ショップを通った。そこに、金持ちの選びを待つホストたちは窓の外に寄りかかっている。彼らはXサンダーが歩き通るのを見ていたが、目に見返してもらわない。特に若いホストたちはそうだ。数時間以内Xサンダーに追われるとわかっている。Xサンダーはトラム食堂を通過してドレイクについた。ロムは一人で前に座って物乞いしていた。一緒にいた子達は嵐を見た瞬間散ってしまった。ロムは動きもしなかった。まだ早い。嵐はロムの前に止まった。ひざまでの黒いハイブーツは午後の日差しに光って見えた。ブーツを見たロムは目をあげ、日差しが嵐のヘルメットのフェースプレートに反射されてきた。やせこけただらしのない少年であるロムと比べて、嵐は2倍の大きさだった。

「今日はいくら取ったかい？」Xサンダーはナイトスティックを手に叩きながらロムに返事を要した。

ロムは帽子をまわしながら小銭を計算した。「700 クレジットくらいある」と。

「それは悪くない。食べていけるな。」Xサンダーはコメントした。「ちゃんと食べてる？先週よりも細いけど」

「今週のごみ狩りはだめだ。700は一週間の成果だ。貯金しようと思ってさ。この一週間まだ何も食べていないよ」そういいながら、ロムのおなかの鳴き声もXサンダーの耳に届いた。ロムがかawaiiそうと思った。ほかに何もできなかった。エシュロンに生きることは難しかった。ロムはそれほどいいハッカーではないのに、体を売ることを拒絶した。試験された上、ロムは自分のエーギスやサイキックパワーのマニフェストをコントロールできないし、PSI 調整に記憶力が影響され、全てのハッキングスキルを忘れた彼は、新しい情報、たとえばロムという新しい名前、を保存することが難しかった。ロムはすなわちリード・オンリー・メモリーで、読み出し専用メモリーのことだ。失敗したPSI 調整の後、彼は自分を吹き替えた。この街で誰もがロムの本名がわからなかった。ニックネームだけだった。彼は隠した。

Xサンダーはポケットからプロテインドリンクパックを取り出した。パトロールに出る区域警察官はみんなもらえるやつだった。

「はいこれ」Xサンダーはロムにプロテインパックを渡した。ロムの目がほしいと叫ぶが、いやいやながら手を出した。きっと腹が減っていた。

ストローが入るプロテインパックを受けたロムは立ち上がった。バイオエンジニア栄養剤は12時間支えるが、ロムにとって数日の食品だった。パックを受け取ってから、ロムはXサンダーに深くお辞儀した。

「そんなに謙虚な態度はいらないよ。ロムは俺と平等だ。エリート政府がどんなプロパガンダを使っても、俺の下にいると思うな。」Xサンダーは低くつぶやいた。ナイトスティックを引っ張り出したXサンダーは説教するように、ロムに光を乱暴に投げた。区域警察局にえこひいきされるとロムは孤立され、そしてぼろぼろに殴られるかレイプされてしまう。Xサンダーはそう望まなかった。ロムの右肩に力強く打ち、相手を後ろに立たせた。もう一回ナイトスティックを当てたXサンダーは、ロムが座り戻って、プロテインパックをコートのポケットに隠したのを見てから離れた。しばらくこの宝物は守られた。

Xサンダーは次の4時間パトロールを続けた。それから夜の当番は始まった。手帳にロムのIDコードがつかまった。場所が変わって、別の街へ違う方向に向かったロムは逃げるチャンスを手にいれた。

Xサンダーはため息を漏らした。妻と息子に会いたくなかった。息子が生きていれば、今もロムの年だ。アスター街でサイキックに殺害されて以来、Xサンダーはその運命の夜、自分の妻が歩んだ全ての街をパトロールしてきた。犯罪者を捕まえるまで止まらないと誓った。6:00PMの街の門限の警報が鳴り出した同時に、Xサンダーの手帳にDNAタグが登録した。そのタグは移動を止めてからまた動き出し、ヒートシグネチャーはXサンダーに向

かってきた。X サンダーはトラックにコールを出し、夜間のラウンドアップを再開した。でも今度の DNA シグネチャーはサイキックパワーだった。X サンダーは手帳をポケットにしまい、信号の方向に向かって裏地を走り出した。

第一部終

アラシが来る-第2部

シフトチェンジ中だ。区域の警察官は準備室で防護具を装着し、午後のパトロールに用意していた。Xサンダー嵐は自分のロッカーの前に立って、黒い制服のシャツのボタンを留めた。ロッカーのドアの裏に、妻の写真は飾られた。シャツのボタンを留めながら写真を見つめたXサンダーは、なんだか遠く感じてしまった。

Xサンダーが防弾ベストを着るとき、キャプテンは入ってきた。「5分後に会議だ。全員参加だ。いいか。」

「了解！」忙しい部屋から全員が一斉に返事した。警察たちは急いでいた。Xサンダーはベストを着てから座って、ピカピカのひざブーツを履いた。そして立ち上がって、ロッカーに戻り、ナイトスティックを引っ張り出してロッカーを閉じる前、妻の写真を軽く触った。からかってくれた同僚について歩きながら、些細なことを話し合うXサンダーは、ヘルメットをしっかりとつかんだ。

「Xよ、新しいシエモーターサイクルを見たぞ。スグー払っちゃったろう？」とXサンダーに追いかけた警察官は聞いた。

「そう。ヒロコって名前付けた。美人だぜ。」とXサンダーは答えた。

「奥さんの名前だよね。」

今度Xサンダーは黙って歩き出した。残された同僚は自分の不当な発言に気づいた。

彼らは会議室に行って座った。キャプテンは事情説明を始めた。昨日の夜、Shizuoko Ghettoに近いEchelonsの避難所15にて、事故があった。Xサンダーは説明を聞いて、コンビニの監視カメラから取られたビデオは全部のシーンを撮った。少年ホストは殺された。サイキックがやったことに見える。その少年はPSIサージにとらわれ、ビルの壁に投げられた。意識を失った長時間において、犯罪者は反抗されずに少年をつかまされた。その子はさされた。ビデオはとても残酷だ。キャプテンは続けた。

「現場の死体の胸に、残されたものがある。事後においていかれたように見える。」キャプテンは躊躇した。ほかの警察官にうなずいて、プラスチックの証拠袋を机に置いた。ビデオのスクリーンはその部品にズームインした。血がついた小さな白い折鶴だった。折られた紙に小さな黄色い花が白い地にあった。Xサンダーの目は大きく張った。息も止まりそうだった。キャプテンは黙って彼を見て、視線で警告した。Xサンダーは見上げもせず、ただビデオスクリーンにある折鶴を見つめた。

「これは6ヶ月前のことをやったのと同じ人物と思われる。シグネチャーはまったく同じだ。」キャプテンがいった人物は、Xサンダーの妻を殺した人だった。

Xサンダーはロムを心配した。Echelonsの街に生きるホームレスのサイキックであるロムを少しの間に心配したが、すぐに怒りが主導するようになった。隣にいる同僚はXサンダ

一の変化を感じた。警察局にサイキックがほかにいないが、Xサンダーみたいにサイキックパワーを持つ警察は何人かいる。彼らは PSI フェクションなどでサイキック秘密操縦者として訓練されなかったが、人間の行動から感情的な変化を察する能力はある。

キャプテンは捜査命令を出した。犯人の画像はよく見られなかった。ビデオの中では長袖と帽子に指なし手袋だった。頭から足まできちんと包まれ、放射性降下物に対する用心かもしれない。病気にもっと弱くさせる放射線の影響を一部食い止めるヨウ素錠剤が手に入れないかもしれない。

次の6時間は続いた。そして 6:00PM の門限ベルが鳴ると、街灯もついた。トラックは2回来て、3人を収穫した。「嵐」につかまれた。Xサンダーはパトロールにおいて、ロムのDNAシグネチャーを2回もつかまえた。2回目のとき、ロムのスクランブルアプリは効かなかったようだ。

ロムは手帳の辺を軽く叩き、裏地から一歩はなれて街灯の光に入った。なぜDNAのIDスクランブルアプリが動かないか調べたかった。没頭していた間、誰かが後ろから近づいたことも気づかなかった。

「チクショウ、どうなってるんだ」とロムは手帳を叩きながらアプリの設定をチェックした。新しいアプリは買えなかった。これは動かなければならなかった。全て完璧だが、Echelons ID からロムのDNAのIDシグネチャーはスクランブルできなかった。Xサンダーは自分の手帳からロムの信号を見つけ、トラックに発信しながらロムに向かった。たとえロムを狩ってケデックの鉾山にある重労働キャンプに送っても、街からつれていて、危険から離れてもらわなければならなかった。

このとき、ほかのDNAシグネチャーとヒート信号はロムの信号に近づいた。その信号にサイキックパワーがある。レベルはアプリに登録されていた。Xサンダーは目の前の手帳から顔を上げ、前にロムが見えた。ほかの信号はロムに向かっているが、ロムは手帳のチェックに専念して気づかなかった。

Xサンダーのスクリーンに警報が表示された。そのサイキック信号は、妻の悲劇が発生し平ら、Xサンダーがずっと追いかけてきたものだ。Xサンダーはロムを見ながら走り出した。ロムが見え、そして誰かが近づいて手を上げた。PSIサージを発するようだった。

「嵐が来た！」とXサンダーはロムに向かって走りながらナイトスティックを振って大声で叫んだ。

ロムは警告を聞いて手帳から顔を上げ、トラックを見た。第三者に気づかなかった。

ロムは手帳を握って Shizuoko Ghetto に逃げた。Xサンダーからもらったプロテインパックは走る途中でポケットから落ちた。ロムは戻って拾うかどうか少し躊躇して止まったが、エイジスを持つ区域警察局の人間じゃない誰かに追われていることに気づいた。その人の両手の周りにサイキックパワーのマニフェストが燃えた。ロムはプロテインパックをあきらめて、速やかに迷路に消えた。追っかけた人は間近についたが、何も手に入らなかった。

ロムは消えた。

X サンダーは走り続け、ロムの信号が消えたことに気づいた。範囲を超えたに違いない。ロムを追っかけるサイキックの信号も消えた。X サンダーはまたそいつを見失った。足を止めて、地面に落ちたプロテインパックを見たX サンダーは拾ってきた。迷路には入れられなかった。防衛境界を超えた。ロムを見つけ、保護してやる方法を考えなければならなかった。自分の息子と妻に発生したことを息子に似たロムに発生させたりできないと思うのも自分勝手だった。X サンダーはプロテインパックを自分のポケットに戻した。手帳を持ちながら道に沿ってもう一回眺めて、ロムの信号をまた探そうと頑張ったが、何もなかった。この地域の放射線はエシュロンのその他地域より高かった。X サンダーはため息をついて振り向いた。シズオコ・ゲットにおいて、迷路において、ロムは自分を守らなければならなかった。

第2部終

アラシは来る-第3部

日曜日だった。Xサンダー・アラシは週に一日休む日にいつもアパートの掃除、雑用、あと妻と息子の墓参りに時間を使ってしまった。お墓は避難所 5 を離れるエシュロンの霊廟にあった。ダイオニシス・エフェクトの原子爆弾が投下されたあと、全てが燃やされたので、妻と息子は霊廟の白い壁に一つのタイルを残した。二人の遺灰は一つのツボにいれられた。

以前、Xサンダーは地下鉄で避難所 15 から避難所 5 に行っていた。妻に死なれたあと、彼は家を諦め、仕事にもっと近い地味なアパートに引っ越した。Xサンダーは花を持ってきて、妻のタイルを拭いて、右にある花瓶に花をいれた。ジャンナッシー島、妻の実家だった太平洋領域のホームランドの国花であるカーサイラスだった。彼女はその青い色が気に入っていた。Xサンダーはベンチに座って、妻とおよそ一時間話してから帰った。今日はルートを変えた。出勤することにした。

Xサンダーは家について、探せる一番汚いボロボロ服に着替えた。ズボンが裂いて、シャツにアパートに引っ越したばかりの時、ペンキを塗った時に飛んだペンキの汚れがついていた。外に出た時、コンクリートのゴミに靴をこすって、もっと古く見えるようにした。手帳を確認したあと、地下鉄に向かって旅を始めた。長袖のジャケットに、イアカバーのつく帽子、そして指なし手袋で自分を包んだ。いつもパトロールしたところより、放射線がやや高いところに向かっていた。地下鉄に乗ったら、Xサンダーはドアの近くに立ち、薬箱を取り出して、慎重のためヨウ素錠剤を2つ飲んだ。今から向かうところは危険だと思われていた。地下鉄は地面の下で軌道に沿って走り、Xサンダーを一番近い駅まで送った。それは区域に近く、エシュロンの中にあった。シズオコ・ゲットに行くのだ。駅がなかった。歩くことにした。

地下鉄はラファイエット駅の地下に止まった。ゲットに近づくほど、ビルがもっと破壊された様子だった。この地区は廃棄されたが、人々はまだここで生きていた。一部のビルの骨格はもろくなったが、そこにまだ人が住んで、政府もシチゼンでない彼らのために修繕しようとしなかった。Xサンダーは階段を上って、地下鉄駅を出てきた。

そこに人が沢山いた。だらしなく、絶望に包まれた。Xサンダーは手帳を出してナビゲーション下。地図に、シズオコ・ゲットがはっきり見えた。一時間ほど歩いて、裏地に、ビル間に記しのところまでやってきた。「迷路」って書いてあった。そこでビルは互いに寄りかかって、通廊と狭い裏地を成したため、とても暗い。どこへもいけないのもあった。Xサンダーは手帳に目を伏せ、指示する矢印があった。それをクリックし、地図を前に進めた。警告が出た。「現在の地域に地図がない。街と裏地は精確ではない。戻るか。」

「いいえ」をクリックしたら、地図に大きな空白を表示してくれた。地図を閉じて、パーソン・リーダー・スキャンを起動した。地域全体の子供に対して、複数のヒートシグネチャーとDNAのIDが読める設備だった。迷路はいい隠れどころだった。迷子にならないように。

Xサンダーはしばらく歩き回った。元の道で戻れるように、曲がったところを全部手帳でマークした。マッピングシステムのGPSをつけて、自分のIDが出てきた。地図はIDの衛

星追跡によって、通り過ぎた道を全部ログして、空白に街の形が現れ始めた。

角を曲がった。雪が降っているように見えたが、薄い灰色だった。周りの放射線レベルを測ってみたが、アパート近くのより少し高かった。保護服のジッパーを首まで閉じて、ギアハットを少し引き下げて、耳と首を全部覆うようにした。

ずっと追っかけていたサイキックの信号が急にスクリーンに出てきた。Xサンダーは裏地に止まって、手帳を前に突き出して信号の位置を突き止めようとしたが、精確な地図がないのでそれは難しかった。前に裏地の交差点が見えて、それに向かった。いくつかの裏地が交じるところに立って、信号がはっきり出るまで各方向に手帳を突き出してみた。

歩き始めた。ドアが吹き飛ばされたようなビルの入り口に立った。火災にあったかのように、壁は真っ黒だった。その信号はこのビルにあるに間違いなかった。ロムのもそうだった。そのサイキックはロムが目当てか。

2つの信号の間に距離があった。Xサンダーはビルに入った。隅角の闇に子供が見えた。目が闇の中に光っているようだった。今までビルで見た人と同じく、放射線のせいで病気に苦しんでいた。角を曲がると、その子の方向に手帳を当てた瞬間、誰かがやたらに撃ちまわる姿を見た。Xサンダーは歩き続け、子供とねずみが起こされて散ってしまった。角を曲がったXサンダーはロムにぶつかって、道を止められた。

「ここで何をやってるんだ。ここから離れろ。セーフゾーンだ、区域警察は出入り禁止だ。」とロムの叫び声はへりにいた人たちを起こしたようだ。集まってきた。子供たちはXサンダーの周りに集まってきた。体が大きくても、こんなに多い子供に囲まれると実に不利だった。

Xサンダーは手帳に目を伏せ、囲まれた後、そのサイキック信号が近づいたことに気づいた。ロムは腰を下ろし、壁から落ちたコンクリートの塊を拾ってXサンダーに投げた。ほかの子も見習った。Xサンダーは引き返しながらも手帳を持ち上げ、目でその群れを捜査していた。左に向くとサイキックのヒートシグネチャーが捕らえた。その人殺しが目に入ったとき、ロムはXサンダーの腕を石で的中した。

Xサンダーは反応して腕を動かし、ロムを見つめた。そのサイキックも同じことをして、悪意の微笑を浮かべた。Xサンダーはそのサイキックがロムを目当てる理由がやっとわかった。Xサンダーがロムを助けたことが最も可能な原因だった。投げてきた石が強くなって大きくなっていた。Xサンダーは手を上げながら、階段まで退けた。そして石を拾ってロムに投げかけた。逃げ出したXサンダーは手帳の信号について、地下鉄まで戻った。

第3部終

アラシは来る-第4部

ロムは街角でつまらなさそうに立った。避難所 15 のエシュロンにある X レート雑誌ショップのザ・ホール近く、アスター街にいたビルの外に寄りかかって、買ってもらう人を探すホストがいた。ロムはショップの窓に近づいた。男がロムに歩み寄った。ジャケット、手袋、帽子、医療フェイスマスクと長いズボンに覆われる男は震えていた。彼の目が光って、原爆の放射線が病気の原因だった。

「500 クレジットあげる。フェラチオやってくれ。」と男は言った。

ロムは男に振り向いた。500 クレジットは一週間食べられる。この街で体を売ったことがない。けど一週間何も食べていなかった。断りにくかった。フェラチオは本当のセックスじゃないよな。

「こんなにえらいことやって何がもらえる？」ロムは壁によって疑った。指なし手袋をかぶった手を顔に近づけ、指先に息を吹いた。外は寒かった。今日のエシュロンの放射線レベルも高かった。

金があればヨウ素剤と食物に使った。放射線と戦うヨウ素薬はいつも最優先だったが、買えない日もあった。ポケットに手を入れ、踵の上に転がせた。

「飲み込めるんだ」と男が言いながら、ポケットからクレジットカードを出した。自分が上手だと。

「俺が何でそんなことをするわけ？あんたは酔ってる。自分の放射線はもういっぱいだ。あんたのが要らない。」と言いながら、ロムは離れようとした。

男はロムの腕をつかまえた。「1000 クレジットだ。相当おなかがすいているとわかっている。おなかが鳴りっぱなしで、栄養失調のくまも出てる。2000 はどうだ」

「こんなに多く出すなんて、何を隠してるんだ？」と、ロムは真剣にその申し出を考えた。

「5000 出す。脱いでセックスできるなら 5000 クレジット払うよ。」男はロムの腕をもっと強くつまめた。その申し出はうますぎた。

男のホストはロムに近づいて、耳に何かをつぶやいてから窓のそばに戻った。ロムの目は大きくなった。腕を急に引っ張ってきたロムは、

「いやだ。餓死しても体は売らないことは問答無用だ。」と叫んだ。「最初の程度ならやったかもしれない。けどスポットのやつに触りたくないんだ。俺から離れろ！」と男を駆除した。

その男は何もできず、街を離れた。スポットは触れなかった。セックスで感染される病気

に防いでワクチンを注射したホストでもスポットと無茶なことをしなかった。それは血液病だった。

ロムは注意してくれたホストに行って例を言った。

「疲れそうだね。食べていないか。」とそのホストは聞いた。

ロムはまた両手に息を吹きながら話を続けた。「いいえ何も。700 クレジットを儲けたが、全部ヨウ素薬を買ってしまった。一週間何も食べていないんだ。」

そのホストはポケットから丸薬ボトルを取り出した。それはまともに処方されたヨウ素薬だった。ロムは闇市場のドラッグディーラーから自分の薬を買わなければならなかった。ホストはまずボトルを振ってからふたを開けた。

「手を」とそのホストの話を聞いて、ロムは手を突き出した。ホストは結構儲けるけど、買主からレイプと殴打されることを我慢しなければならなかった。彼らは毎年ホストカードという免許を登録と更新し、仕事の場所を契約し、罰金を払って、おしゃれもしなければならなかった。全ては金がかかった。

ホストはロムの手に半分の薬を入れた。片手だけじゃ持てないほどだった。ロムは速やかに手を閉じ、ポケットに移した。それは一週間分だった。普通の用量は1日3つだった。ロムはいつも1つしか取らないが、必要の最小限はキープできた。

「何でこんなに沢山を？」ロムはホストに深くお辞儀した。

ホストは少しとまっていた。いいことしたかった。

「毎日おながすいているだろう。食堂の買えないものを見つめていたのを見たんだ。ごみ箱を探して、何か食えるものを探すのも見ていた。そして毎日ここを走り追って、嵐がくるって注意してくれたりした。諦めたことがない。僕たちはホストだ。一番低いドン底の存在だといわれる。君たちサイキックよりも低い。けど君は毎日来ている。そいつが来た、僕たちをケデック鉱山に連れて行くんだと教えてくれる。ほかに誰も守ってくれない。僕たちに恩があるよ。」

「公平だ。俺が生き残るために同じことをすれば食べていけるよ。お前らは俺よりすごい。俺はただやせこけたごみだ。君は本当にセクシーよ。誰も俺のこと見たりしねえ。」とロムは言った。ホストはうなずいた。ロムは正しかった。彼には無理だった。そのホストは人形みたいだし、うまくやっていたらう。

ホストは少し休んだ後、歩道にゆっくりやってきた車に狙った。車窓から手を振る男を見て、ホストは車に歩み寄った。ロムは彼を待った。運転席の男と一分間ほど話した後、ホストは振り向いてロムを呼んだ。

「処方のおり薬を飲んで。1日3つだ。自分をごまかしちゃ許さないよ」と言ったら、ホストは乗客席に回って男の車に入った。そのルックスとセクシーなケツアナはいい商売を勝ち取ってくれた。ホストはその男に待てとってから、シートに座って前に傾け、男と窓を超えてロムを呼び返した。

「嵐が来るよ。もうすぐ6時だ。」とホストは叫んだ。ロムは手を振って、車が離れた。この仕事で5000クレジットはもらえそうだった。早く儲けるもう一つの方法はハッキングだった。ロムはヨウ素薬のポケットを叩いて、一つ取り出して飲んだ。当日最初の薬だった。今朝使い切った。前の日も一個しか飲まなかった。

ロムは街の遠くを眺め、手帳を出した。今は5:45PMだった。いつも夜を過ごしたシズオコ・ゲットと廃棄された地下鉄の駅に戻ろうと考える時間だ。両手の周りに、サイキックパワーのエイジス・マニフェストが光ってきた。いつか自分でヨウ素薬を買うことが得きるかもしれないが、エイジスを制御するPSI減少薬のニューロサインが買える日は永遠になかった。ロムはゲットに向かって足を速めた。警察は門限を問わず、エイジスの理由で彼を狩る。

街を歩くロムを誰かが見ている。ロムの撤退する姿を見て、目を輝いた誰かは尾行を始めた。門限のベルは鳴り出した。ロムはゲットに消え、ゲットに念動し、廃棄された地下鉄に入った。鍵がかかった門の前について、中に念力が入った。追跡者は見失った。

アラシはアスターでロムのIDシグネチャーを探していたが、ついてなかった。食堂もザ・ホールもチェックした。ロムはいなかった。巡りは続いた。

ロムは地下鉄にあるスクワットで1時間ほどつぶした。マットとケデックセルランプ、着替えが一着、それらがロムの全てだった。ケデックランプの隣は配給パックの空箱だったが、その箱は長い間空っぽだった。ロムはラックサックを開け、水をチェックしなければならなかった。それを蒸留し、二重の処理とフィルターをかけ、放射線の跡を消した。彼は2リットルのボトルを取り出し、カップの半分だけ残っているのに気付いた。

「だめだ。外に出なきゃ。食べ物がなくても水がなきゃ。」ロムは空気と話して、立ち上がってゲットのジュンコ街に念動した。コンビニがあった。

ロムを探していたサイキックは自分の手帳でロムを検索していた。それは区域警察であるXサンダー、又は好きで持つ誰かと同じスキャンシステムだった。ロムが急にそのシステムに現れたのを見た。

「見つけた。」とサイキックは言いながら、ジュンコに向かった。

ロムはコンビニに入って、入り口で歓迎してくれた店長に微笑んだ。後ろの棚に水がおいてあった。4種類があった。正しいものを選ばなければならなかった。たった1種類は適切に処理され、放射線の残留がないものだった。ほかの3種類は信用できなかった。けどロムはどっちが正しいか忘れた。ボトルの後ろにある説明を読んで、最も高い2ボトルをフロントに持ってきた。

「どれがいいほうですか。一部の水に残留があるとわかっています。残留がなくて、完全にきれいな水がほしいです。」とロムは店のオーナーに聞いた。

「この2つはどちらでもありません。ミズアオイがほしいなら、ここに信用できるものがありますよ。」

店長とロムはそれぞれ一つのボトルを取って、店の後ろに行った。ボトルを戻して、店長はロムを冷蔵セクションに連れて行った。一つの冷蔵庫の一番上の段に、ミズアオイと呼ばれる水が2ボトルあった。店長は冷蔵庫のドアを開けて、白いボトルを取り出したもう一つのボトルはグリーンだった。

「両方ともミズアオイです。白は水で、緑はお茶です。放射線がありません」店長はロムにボトルを渡して、カウンターまで持っていってもらった。

「500クレジットになります。」店長の話にロムは眉をひそめた

「金も食べ物もない。一週間何も食べなかったけど、水が必要なんだ。慈善としてちょうだいとはいづらいが、でないと盗むしかないんだ。うそはつきたくない。」とロムは悲しく言った。

店長は同情した目線で水を渡した。

「今度はぜったいに払うよ。誓うから。」ロムは水のボトルを握って店長に深くお辞儀した。長く居残った。

「坊や。無理しないでよ。喜んで助けるから。」と、店長はロムに微笑んだ。

そのサイキックは店内にいて、その出会いを全部見た。ロムが店を離れていくのを見ていた。そしてカウンターに行き、手で体を支えて傾けた。

「その子を助けたのかい。」とそのサイキックは聞いた。

「そうです。本当にいい子ですから。」と店長は答えた。

「もうあいつを助けるな！」そのサイキックは怒鳴って、PSIサージを店の真ん中に投げ、3列の棚を倒した。商品は床に散らかってむちゃくちゃだった。サイキックはエージスが光る両手を当て、店長の顔に近づいた。

「わかった。もう助けない。店を壊すのはやめて。」

サイキックはエージスを消して、店を出て行った。

ロムはスクワットに念動で戻るまでボトルをしっかり握った。ここは放射線を遮断する廃

棄された地下鉄の駅だった。意外の福祉だった。ほかに誰もいないようだった。水を一口のんで、バッグにしまった。夜の準備をして寝た。

次の日、ロムはサイキックパワーを感じて目覚めた。強い感情があった。彼は少し慎重だった。地下鉄のスクワットを隠そうと、あすたーに直接に念動した。ついたのはもう遅かった。正常より長く眠った。余分のヨウ素薬は利いた。寝ていた間に若返った。ロムは壁によっておなかを押さえた。痛いほどになった。何か食べなくちゃ。

アスターにレストランがあって、ロムはそれに近い道を選んだ。キッチンのドアの外に、ゴミ箱があった。ロムは手帳を出して時間を見た。後数分間。5分後、誰かがドアから出て、4つのゴミ袋をゴミ箱に捨ててから中に戻った。ロムはその人がまた出てこないように確認してから目標に向かった。

彼はゴミ箱の壁をつかんで、足を上げてすがりついた。中にいくつかの袋があった。どれが新しいものか判断品狩ればならなかった。中に身を傾け、一つあけてみたが、腐った古いものだった。もう一回。野菜のくずだった。そしてプラスチックボウルにご飯がいっぱい、そして紙の容器に面がいっぱい、肉の切り落としもあった。えらい収穫だった。ロムはそれらの容器を引っ張り出して、ゴミ箱の棚に置いた。肉を口に放り込んだ。今まで食べた最もおいしい肉だった。ロムは5切れ食べて、残りの3切れをポケットに入れてゴミ箱を這い上がった。彼は路地から持ち出した2つのボウルを持って街に戻って、ビルに導く階段で口の中の食べ物を手でかきはじめた。それだけで一週間生き残れる。有頂天だった。胃袋もそれが好きだった。

食べ終わったロムはおなかがいっぱいと感じて、絶え間なかった頭痛も消えた。それは食べたからではなく、頭脳に伝達された信号はもう飢餓を示さないからだった。そのせいで頭が痛くて、規律正しく食べないから、その信号の意味も忘れた。ロムは手を合わせて、食物のために女神に感謝した。

ヨウ素薬をくれたホストはロムのところに来て、階段に座った。

「いいね。食べているんだ。心配してたよ。」

「そうだ。ラーメンとご飯。大食いだね俺は。」ロムは笑った。今は幸せだが、意識の奥に、食べ物がもう見つけれなく、また飢餓に陥る恐れがあった。

ホストは街の向こうを見た。「僕が言いたいのは、誰かがロムを尾行しているようだ。見るな。そいつは街の向こうで、灰色の長袖セーターに黒い手袋、帽子をかぶっている。ロムに見つめてもう一時間以上だ。」

ロムは階段から見なかったが、ホストにうなずいて、周りにPSIを発信した。近くに多様な人を感じ取ったが、街の向こうにいた人から悪意を感じた。

「うん。俺に何か求めているんだ。何しろろくなもんじゃない。離れたほうが。」とロムは言った。

「ここにいるほうがいい。僕とほかのホストは見張ってやるから。」

「なあ、君たちも仕事があるよ。赤ちゃん取り扱いはしなくていい。自分の面倒をよく見てるから。」

「気をつけてロム」ホストは立ち上がったロムに言った。

門限のチャイムが鳴った。

「嵐が来る！」ロムは全てのホストに向かって大声をさした。一部は散っていった。友人のホストは遠くへ行った。ロムは街灯がついてくる中、道を進んだ。PSI をアクティブにさせて、悪意が尾行していると感じた。街角に止まって周りを見た。

X サンダー・アラシは近くに来て、手帳でロムとほかのサイキック信号を見つけた。顔を上げると、ロムとそのサイキックが向こうにいたと発見した。ゲットに近づいた。ロムは手帳を出して、スキャンアプリを起動して、サイキックパワーを検索した。付近のサイキックのレベルを全て表示する。彼の信号は正常のレベル 26 まで来た。尾行したサイキックはレベル 45 まで来ていた。ロムはこの人の相手になれなかった。

ロムは渋い顔をして手帳をポケットにしまった。全てに決着をつけたかった。この人が自分を目当てするのなら、ほしいものが手に入るまでずっと追っかけてくるだろう。

X サンダーは角に立って、それからゆっくり振り向いたロムを見ていた。目でサイキックの追跡者を見て、乱暴なジェスチャーをした。そのサイキックはエージスをつけて、消えたロムに向かって走り出した。X サンダーは手帳をしまってその二人を追いかけた。彼らはゲットに入った。X サンダーは少し躊躇した。シズオコ・ゲットは彼の管轄を超えた。でもロムを見つけないと。X サンダーは走って入り、前に迷路の印が掲げているのを見た。ロムのスピードが速い。X サンダーは加速した。二人を見失いたくなかった。

第4部終

アラシが来る-第5部

Xサンダー・アラシはロムとそのサイキックの後に追っかけている。何らかの理由で、ロムは念動しなかった。Xサンダーもその理由がわからなかった。ロムは慎重だった。そのサイキックが自分の信号を把握していたら、自分が念動すると、相手も念動の波流に乗って廃棄地下鉄のスクワットを見つける。その秘密を守らないと。方向を変えるとき、ロムは壁に手を支え、速やかに違う路地に入ってしまった。複雑なルートを走ることで追跡者を振ってしまうようにがんばった。ロムは隙間で後ろを見た。誰もいなかった。ロムは後ろに振り向いた。

「待て！」追跡者は前に現れ、ダッシュしてきた。

「チクショウ！」ロムはののしって、来た方向に力いっぱい走った。追跡者は諦めなかった。ロムは左を見て、自分の来た裏地からXサンダーが走り出したのを見た。Xサンダーはロムの移動について、追っかけていたサイキックを見つけた。ロムはXサンダーを通り過ぎて止まらなかった。そのサイキックはXサンダーの前に止まって、上下によく見てから、笑ってまたロムを追っかけた。Xサンダーは後を追った。ロムは次の角を曲がって消えた。

Xサンダーはその角で何も見つからなかった。裏地は空っぽだった。寄り合っているビルは高く、街灯もちゃんとメンテナンスされていなかった。Xサンダーは進んで、手帳を取り出した。地図上は迷路の中のシズオコ・ゲットにいと提示したが、空白だけだった。この地域に地図がなかった。Xサンダーは手帳を持ち上げて、スキャンした。およそ20秒の後、そのサイキックの信号はスクリーンに現れた。前にいた。Xサンダーは数歩前に歩き、顔を上げた。ちょっと離れた前に、際にレベルのところ、頭の上に橋があった。ロムは橋を突進していた。

「左へ」と鋭い声で叫びながら走った。およそ15秒後、そのサイキックは橋を渡った。Xサンダーは左を見たら、ビルに入るドアがあった。Xサンダーはそれに向かって走り、中に入ったら階段があった。二階に上ると、少し方向が混乱した。

数歩歩いて、前に橋があるという印を見てそれに向かった。その橋について、来たときの道を見下ろした。迷路は狂乱的だった。自分がどこにいるかわからなかった。橋を渡りながら手帳を出した。GPSをつかって自分のIDを追跡してもらうように設定し、空白のところに自分の路線が現れてきた。

ロムは橋の向こうの次の部屋に隠れていた。そこに破片と建築設備が沢山あって、隠れるところがいくつもあった。ロムはこっそり出て、追跡者がゆっくり歩き回っているのを見た。追跡者は次の部屋に入った。Xサンダーは暗い部屋に現れ、手帳の光以外何も見えなかった。ロムはその光を見て、隠れ場所から出て、Xサンダーを通過してほかの階段を駆け降りた。Xサンダーは上を見て、ちょうどロムが階段に消えたときの光をチラッと見た。そのサイキックは音を聞いて、部屋に戻って階段を駆け降りた。ロムは二人の後を追った。

ロムはスピードアップした。疲れてきたロムは隠せる場所を探さないといけなかった。彼は外に出て、裏地を走ってゴミ箱の中に這入った。そこで両手で口を塞ぎ、呼吸を静めた。サイキックは通り過ぎて裏地の遠くへ走った。ロムはゴミ箱の中から石ころを拾って、立ち上がって反対側の交差点に投げてまたしゃがんできた。そのサイキックは物音を聞いて戻って、ほかの裏地を選んだ。ロムは静かにゴミ箱から這い上がって、また走り出した。Xサンダーは駆けてきて、ロムのコートの末が角で消えたのを見た。左に見ると、別の裏地を走ったサイキックが見えた。

ロムは別のビルの玄関に身を隠れ、手帳を出してマスクモードに設定した。DNAのIDとサイキックシグネチャーをマスクしてくれる。手帳からチャイムが鳴って、設定完了とマスク開始を教えてくれた。ロムは玄関から出て、裏地の真ん中についた。サイキックは見つけた。ロムは走ったが、サイキックは彼の真上に念動し、彼を倒した。ロムは倒れて、手帳も投げ出された。システムは失効して、マスクは止まった。

「こんにちは。」サイキックはロムの上から、エージスをつけながら近づいた。

サイキックは傾いて、ピシピシとエージスがスパキングしている手をロムの耳に置いて、電波サージをロムの脳に送り始めた。ロムは悲鳴を出して、サイキックの足元で転がりはじめた。

Xサンダーはその悲鳴を聞いて、手帳を持ち上げてロムの信号を見つけた。直ちに向かった。ロムは動いていなかった。そのサイキックの信号は真上にあった。ロムのところに行かなきゃ。息子の姿が頭に現れてきた。足を速めた。ロムを助けなきゃ。

裏地の上に、壊れた窓からほかのホームレスの子がサイキックに攻撃されたロムを見ていた。助けに来たりもせず、ただ見ていた。Xサンダーは走りながら手帳をポケットにしまい、ナイトスティックを腰のホルスターから引っ張り出して、サイキックに照らした。

サイキックは後ろのポケットから長い刀を取り出し、刃を向かわせた。横になって動きもせず見上げるロムの上に両手で刀を持ち上げた。エージスに衝撃されたロムは方向を失った。ロムはサイキックの下で頭を何回も振って、やっと刀の存在がわかった。サイキックが刀をロムの胸に刺そうとしたとき、ロムは両手でサイキックの腕を拒んだ。20回刺されたホストもいた。ロムは命を大事にしていたが、サイキックはもっと強かった。ロムの努力にかかわらず、刀は落ちてきた。

「いやだ！」ロムの抵抗は失敗した。刀はロムのそばに刺された。ロムはつかんで方向を変えた。ロムは衝撃に負けて体を丸くした。サイキックがもう一度刀を持ち上げたとき、Xサンダーは駆けつけて、後ろからナイトスティックをサイキックに投げかけた。サイキックは刀を握りそこなって倒れた。ロムはあわてながら手で退けた。

サイキックは感知しまわって、刀を取り戻してからXサンダーに刺そうとした。Xサンダーはナイトスティックでそれを叩き落ちて、もう一回倒した。

サイキックはエージスを使って、XサンダーにPSIサージを発したが、また地面に倒され

た。サイキックは刀をとりだして、裏地に沿って退けるロムに向けた。ロムは傷ついて、行動が遅かった。

Xサンダーはナイトスティックを握って倒れたが、少しだけのPSIサージは傷つけたりできなかった。区域警察官はみんな身体的な攻撃に耐えるように訓練された。また立ち上がって、刀を持ってロムを危害するサイキックを追っかけた。ロムは両手で刀を抵抗していたが、その刃物に手を刺される場所だった。

刀はロムの手に深く没入した。ロムは片方の手で刀を握って退けた。血は落ちていた。

Xサンダーは前に走った。

「助けてやれ！」2階の窓から誰かが叫んだ。Xサンダーは励まされた。サイキックは猛烈に攻撃し、ロムをまた倒して、刀をあげた。ロムは負けそうだった。PSIサージを発したが、レベル45には効果がほとんどなかった。サイキックは刀を挙げたが、Xサンダーに蹴り飛ばされ、ロムの上方から壁にぶつけ込んだ。サイキックは気を失った。Xサンダーはそいつの上に乗って、ナイトスティックでぶん殴った。止まらずに胸と顔を強烈に撃った。Xサンダーは膝で上半身を挙げてサイキックに強烈な打撃を繰り返した。妻と息子を失った苦痛を全部目の前のサイキックに放り出した。

ロムは手を抱えて立ち上がった。高いところにいる観衆を見上げた。そして視線はサイキックを引き裂こうとしているXサンダーに戻った。手は本当に痛かった。血がポタポタ落ちていた。刀は深くまで刺された。

ロムはそこに立って、サイキックをボロボロにしたXサンダーを見ていた。結局体を動かし、腰を下ろしてXサンダーの腕に手を置いた。

「もういい。」ロムは落ち着いた口調で言った。

Xサンダーは殴りを続けた。ロムはしばらく放っておいて、Xサンダーがもう一つ強いヒットを出す前に、ナイトスティックの一端を両手でつかんだ。Xサンダーはロムの方向に顔を向け、ヒットを繰り返そうとしたが、ロムにスティックを掴まれた。

「奥様はこれを望んでいませんよ。」ロムの声は弱かった。

Xサンダーはロムの目の奥を見つめて、怒りが消えたようになくなった。息子がそこで止めてくれたようだった。Xサンダーは頭を振っていたら、息子がまたロムの姿に戻った。

「こいつがやったことをちゃんと償ってもらいましょう。こうじゃなくて。」ロムはナイトスティックを手離した。

Xサンダーは怒りから抜き出し、ナイトスティックを地面に置いた。サイキックの首筋に手を当てて脈を感じとった。まだ生きています。ポケットから折りたたみ制限カラーを出した。それはサイキックパワーを拘束して無害なものにし、Xサンダーの把握におけるもの

だった。

カラーがサイキックの首をロックしたことを確認して、Xサンダーは立ち上がった。ロムは手を抱え、痛みと落ちていた血で浸透したコートを我慢していた。Xサンダーはナイトスティックをホルスターにしまった。

「こいつに殺されるどころだったよ。20回も刺されたホストがいたんだ。」とXサンダーは言った。

「私がまだ生きているのはアラシさんのおかげです。でなければ、ずっと前にこの街で死んだ。」ロムはそう言って座った。失血して急に疲れを感じた。

二人はしばらく沈黙した。Xサンダーは手帳を出してトラックを迷路の入り口で待ち合わせるようにコールした。

「おい起きろ。」Xサンダーはサイキックに命令した。鼻、片腕、数本の胸骨が殴り壊されたサイキックの顔は血まみれだった。

「君は大丈夫そう？」Xサンダーはロムに聞いた。

「わかりません。目眩がひどいです。」立ち上がったロムは揺れた。脇の傷は思ったより深かった。Xサンダーはコートの下に手を入れて様子を見た。

「病院に行かなきゃ。」

「大丈夫です。」ロムは小さく震えた。意識を失っていた。

そのサイキックは立ち上がった。

「歩け。」Xサンダーはサイキックのカラーに金属の鎖をつけてから命じた。その鎖はXサンダーの腰に結ばれ、2人を一つに束ねた。カラーはサイキックをXサンダーの命令に従わせた。サイキックは区域警察署に連れ戻され、処理されることになった。Xサンダーの妻と息子を殺害した罪を、既知の余命をかけて償ってもらうことが期待できる。

サイキックは一步踏み出したけど、Xサンダーの腰にかけた鎖に引っ張られた。

「止まれ。」Xサンダーの命令に従うサイキックは足を止めた。

「君は大丈夫か。」Xサンダーはロムに向いた。

「わかりません。おかしいですね…」ロムは少し黙ってから答え、バタッと倒れた。

Xサンダーは腰を下ろしてロムを抱き上げた。

「歩け。」X サンダーはロムを抱いて、サイキックを前に歩かせて裏地を進んだ。ロムはゆっくり目を開けた。

「道がわからないんだ。俺たちを連れて外に出な。」ロムが目覚めたのを見て、X サンダーは言った。

「左へ。」意識がほとんどなかったロムは低くつぶやいた。ロムの指示に従って 30 分歩いたが、ロムがまた昏迷した。X サンダーはやっと迷路の入り口とトラックが見えた。

トラックのバックが開き、X サンダーはサイキックを連れて入った。ロムをベンチに置いた。トラックはエシュロンの警察署に向かって夜の暗闇に戻った。

トラックがついた後、サイキックを殺人と殺害未遂で処刑した。ロムを違法滞在としてケデック鉱山の重労働に行かせようとした。X サンダーはキャプテンに反対意見を出した。経緯を全部吐かなければならなかった。ロムの無罪放免は X サンダーの名誉に頼っていた。

X サンダーはローブを探してきて、半分気を失ったロムをオートバイに運んだ。意識を失ったロムを前に載せ、落ちないように自分と束ねた。ロムはまだ血を流していた。区域警察署で誰も見てくれなかった。夜の暗闇を裂けて X サンダーのアパートに戻った。

X サンダーはロムを部屋まで運んで、服と靴を脱いでベッドに寝かせた。ロムの服を洗って、徹夜でそのシャツとズボンにある穴を縫いた。ロムのポケットからヨウ素薬を見つけ、それを他の 90 錠残っているボトルに入れた。X サンダーは一睡もせずロムの側で見ている。4 時間おきにシンスという治療薬を注射した。

ロムはやっと目覚めた。部屋で一人で。服は着ているがもう穴がなかった。ロムは座って部屋を歩き、手を包んだ包帯を見た。

「ここはどこだ。」ロムは叫んだ。ポケットに何かあると気づき、ヨウ素薬のボトルだった。ベッドから飛び起きて部屋を出た。X サンダーがテーブルの前に座って自分のコートを縫い合わせる姿を見た。

「今これを縫ってる。調子はどう？」と X サンダーは聞いた。

「手がまだ痛いんです。ここはどこですか。」とロムは聞いた。

「今俺のアパートにいるよ。好きなだけいていいから。」

ロムは部屋を歩き回った。大きなモニターのスクリーンに今のニュースが流れていたが、声が出ていなかった。彼は壁に這い上がって、骨董になった本をとった。それは実際に印刷されたもので、今はもうそれはなかった。ロムは手で本をこすって、X サンダーの写真を発見した。女性 1 人と自分と同じ歳の子供だった。ROM はその写真を手に取って、そ

の子が自分に酷似することがわかった。

「写真は誰ですか。」ロムはXサンダーに渡した。

Xサンダーは黙って作業を止めた。ロムから写真を受け取ってしばらく何も言わず、ロムをテーブルの向こうに座らせた。写真をおいて、野菜とお肉がたっぷりの熱々のラーメンをロムの前に持ってきた。お箸と一緒に。

「食え。」Xサンダーは言ってまた席に戻って針仕事を再開した。ロムは黙って食べた。完食して話す前に、ロムは躊躇して立ち上がった。

「僕はお子さんではありません。」ロムはお辞儀してまた頭を上げ、「お子さんのようないい子ではありません。僕には取って変えることが無理です。そのサイキックが奪ったものは代替できない貴重なもので、僕はただのゴミくずです。PSI調整は失敗した。エービスがコントロールできないし、毎日3錠のヨウ素薬も買えない私は放射線病気になるのも間近です。もう無駄なことはしないでください。もうすぐ死にますから。この街で生きるのは失敗したんです。」声が沈むがどうも真実のようだった。Xサンダーは彼をスキャンしたが、今は何もないけど、毎日3錠飲まないと病気になるとの警告が出た。

「息子じゃないとわかっている。息子は死んだけど、お前に借りがある。おかげで犯人を捕まった。よければヨウ素薬を提供する。自分を食わせるだけでいい。俺の恩返しだ。」とXサンダーは言って、コートを縫い終わった。

Xサンダーはしばらく黙っていた。

「俺のアパートは避難所15だ。アスターに戻るのも比較的簡単だ。傷に包帯を巻いたから大丈夫。シンスも注射してやったからこの1日か2日は治る。ヨウ素薬が必要なら門限の後に俺に来て。次の日に用意するから。けど薬はお前のためにあるから売のをやめろ。ロムに借りがあるんだ。いつまでも返しきれない。これくらいはさせてくれ。」

「Xサンダーさんが望むことなら。」ロムはこんなにいいことに出会えるなんて思いもよらなかった。

「じゃ約束だ」

「今行かなきゃ。」ロムは振り向こうとしたが、脇の痛みにひかかった。

「まだ完全に治ってないよ。ここにいた方が。」

ロムは振り向いてまたお辞儀した。そして一分間居残った。「僕は返せませんよ。」Xサンダーの耳に入った声に涙があった。ロムは膝を地面について、手で顔を埋めて泣いた。自業自得だった。違う境遇にいるはずなのに。

ハッカーでした。すごく上手でした。エリートでしたけど欲張りすぎてもっともっとお金

が欲しくて、PSI 調整に行きました。僕は失敗作で、全てのハッキングスキルを忘れてしまいました。何の記憶も保存できなくなりました。リード・オンリー・メモリ、すなわち ROM です。毎日が最初からやり直しのようです。今はこうなっています。当時はそれで良かったなら…」 ロムの声はだんだん小さくなった。

「シティから来たの。シチゼンだけがシティに入れるよ。」 X サンダーは質疑した。
「覚えていません。」

お前のズボン、シャツ、今着ているものを見ろ。ズボンは革製でコートも高いもんだ。シャツはシルクかなんかだよ。エシユロンでそんなもんはないの。シティしかない。お前は実際にシチゼンだ。」

「わかりません。行かなきゃ。」 ロムは手を脇に押さえて玄関に移動した。

「無事でいようロム。」 X サンダーはドアを開けたロムに言った。

「門限の後にヨウ素薬ですよ。」

「そう。お前が受け取ってくればな」

ロムはもう一回お辞儀してドアを閉めた。X サンダーは数時間も静かに座った。今は完全な人間だ。ニュースフィードは新しいストリームのチャイムを鳴らした。X サンダーは大きなモニターに行って音を閉じた。キャストは始まった。

「ヒロコ・アラシとそのお子さんのヒロシを殺害したサイキックは本日審判されました。区域警察官の X サンダー・アラシはシズオコ・ゲットで犯人を逮捕しました。サイキックは5回の命をケデック鉱山で重労働をし、仮釈放のチャンスがありません。X サンダーのおかげで街がもっと安全になりました。区域警察署に感謝します。」

X サンダーは手で口を塞ぎ、強烈な感情に乘っ取られた。

一か月後。門限のパトロール時間に、ロムのシグネチャーを一回しかない取れたことがなかった。しばらく離れて体を回復させた。それから木曜日に、ロムの ID シグネチャーは門限の後のアスターに現れた。ロムは X サンダーを探していた。

X サンダーはやっとロムを見つけた時、ロムの頬が前ほど陥っていないようだった。少し健康に見え、食べていた。

「嵐が来る。」 ロムは X サンダーに近づいて言った。

「それを言っても逃げないお前って面白い。」 X サンダーは返事した。

ロムは笑ってまた真剣になった。

「もっと多い薬が必要です。今は飲まないと感じます。数日間減量しようとしたが、飲まないと気分が悪くなります。スキャンしてもらえますか。」ロムはそう言いながら自分の手帳を取り出した。サイキックがロムを殺そうとした時、ロムの手帳を打ち飛ばした。放射線検知器が壊されたに違いない。たまにしか動かないようだった。ロムはそれに頼って生きていた。新しいアプリも買えないし、新しい手帳は勿論だった。

X サンダーは自分の手帳でロムをスキャンした。数分後結果が出た。

「お前はきれいだけど警告が出た。」

「わかっています。でも昔は1日1錠しか飲みませんでした。」ロムは言った。

「この間190錠のボトルを持ち歩いてお前を待ってた。減量はせんと言っただろ。」

「がっかりさせて申し訳ありません。でも頼ってしまって、苦しいです。今週は2日前に一回しか食べませんでした。それもゴミ箱からのでした。難しくなっているようです。」ロムは言った。

「ポスターを見た。パックラットに関するもんだ。それ聞いたか？」

「いいえ。なんですか。」

「フェイドという名前の誰かがサイキックとハッカーのために安全避難所を建てているようだ。それを考えたほうがいいんだ」

「僕はもうハッカーではありません。」ロムの口調は沈んだが、お腹は鳴り出した。

「俺はお前にこれを返さなきゃ。」X サンダーはポケットからプロテインパックを取り出した。「この前なくしたろ。今返すよ。」と、ロムに渡した。

「ありがとうございます。」ロムはパックを握った。

「はい190錠。もう減量するな。必要な時直ちに俺のところに来い。いいか。それにパックラットのことをチェックして。役に立つかもしれないから。」

「了解です。」ロムはボトルを受け取って、夜の闇に姿を消した。

終わり

著者のバイオ



Natsuya Uesugi is a systems analyst and white hat hacker and has worked in the design of aerospace, semiconductor and financial systems. With a Master's Degree in International Management and a minor in Japanese, Natsuya has been around computers most of his life. He also studied animation and game design in art school, where he finalized the character designs and personalities for the main characters of grydscaen.

He enjoys skydiving, cosplay, anime, and writing poetry. He would like to make a graphic novel of grydscaen some day and actually has of the story, "A Storm's Coming" which is available as a manga on the grydscaen website.